



# こどもの発達と家庭支援①② ～家族・家庭の理解～

東北こども専門学院

19 Sep. 2024

担当：鑑さやか



# 家族とは？

- 1930年代の家族の定義

「夫婦および親子関係にある者を中心とする比較的少数の「\_\_\_\_\_」が緊密に融合する「\_\_\_\_\_」」

「共産的共同」とは・・・

- ①仕事をともにし
- ②住居をともにし
- ③食事をともにし
- ④所有をともにし
- ⑤所属をともにすること



# 現代の家族は1930年代の定義にあてはまるでしょうか？

必ずしも住居や食事、所有、所属を  
ともにしているとはいえない

- ・ 現在最も一般的に用いられる定義  
「夫婦・親子・きょうだいなど「\_\_\_\_\_」を  
主要な成員とし、成員相互の深い感情的かかわり  
あいで結ばれた、「\_\_\_\_\_」 (well-being)  
追求の集団である」

現代社会では、↑の定義にも  
あてはまらない場合もある？



例えば

法的には婚姻関係にない男女

同性愛のカップル

ペット など、それぞれを家族と考えている場合

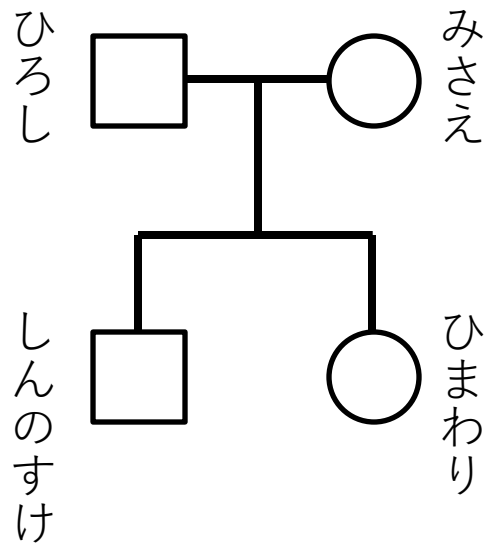
- ・ 「\_\_\_\_\_」のありようは時代とともに変化する
- ・ 家族の生活の場である「\_\_\_\_\_」も、  
時代や社会の変動に伴い変化する



# 家族の形態

# 核家族

- 1組の夫婦と未婚の子ども
- 子どもがいない夫婦だけ
- 夫婦の一方がいない  
ひとり親

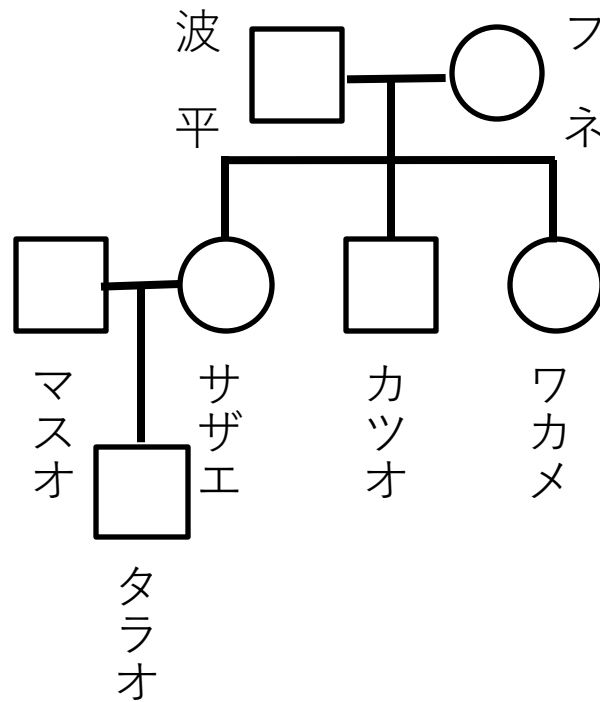


などの家族形態を  
「\_\_\_\_\_」という



# 家族の形態 拡大家族

- 子ども世代と親世代が組み合わさってできる家族を「\_\_\_\_\_」という
- もし、カツオが結婚して磯野家に妻とともに同居したら？  
→きょうだい各々の核家族が融合した形を「\_\_\_\_\_」という



直系家族と複合家族を  
合わせて「\_\_\_\_\_」という



# 世帯とは？

- 現実の生活において家族は、成員間で誰がそのメンバーか一致しないことがあるため、生活体としての単位を明確にするときには「\_\_\_\_\_」という単位が使われる

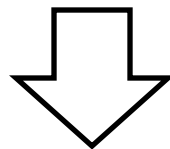


## 家族形態として減少したもの

- 1970年以降、核家族世帯は量的には増加したが全体の割合としては減少
- 三世同居を含む「その他の親族世帯」が20%台から10%台へ減少
- 祖父母や伯父伯母などと一緒に暮らす子どもたちの割合が減少

## 家族形態として増加したもの

- ひとり親世帯
- 単独世帯



地域の中で子どものいる世帯が減少していること、子どもたちが家族のなかで経験する人間関係の数も減ってきていることを意味する





# 多様化する家族

- 新しい自分の家族をつくらない人
- 子どものいる家族が離婚する場合、  
子どもを引き取る側は、  
親と子という家族を維持  
引き取らない側は、家族のいない生活
- 夫婦のいずれか、あるいは双方が、  
以前の婚姻での子どもを連れて再婚すること  
によって形成される家族

→ 「\_\_\_\_\_」

離婚や再婚の増加からステップファミリーが増加  
かつて多かった、配偶者と死別した後の再婚に代わり、  
離婚後に形成されるステップファミリーが増加している



# 家族の機能とは？

「家族が社会の存続と発展のために果たさなければならないさまざまな活動（それを怠ると社会が消滅・崩壊の危機を迎えるような活動）、および内部の家族メンバーの生理的・文化的欲求を充足する活動」

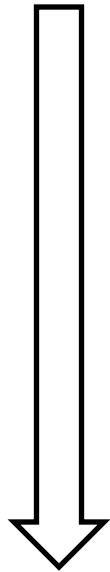
近代工業が発展する以前の家族の機能

- ①生産単位としての経済機能
- ②メンバーを社会的に位置づける地位付与の機能
- ③子どもに基礎的・専門的な知識や技術を伝える教育機能
- ④家族メンバーの生命・財産を守る保護機能
- ⑤日常的な信仰活動を通じて家族メンバーの精神的安定と結束を図る宗教機能
- ⑥家族全体の安らぎを図るレクリエーション機能
- ⑦家族メンバー同士の慈しみや思いやりといった愛情機能



# 第2次、第3次産業の増加と 家族の機能

- 第1次産業が中心の時代



生活単位であると同時に  
生産単位でもある家族

職業が世代から世代へ受け継がれる  
親から子へと必要な知識・技能が伝達  
共同で働くなか、人間が生きるために  
必要なノウハウや価値観も伝達

- 第2次、第3次産業が中心の時代

サラリーマンの増加

直接的な生産活動としての機能の衰退  
子どもの教育機能の衰退



- 職住が分離し、必要な知識・技術を家族のなかで教育することが不可能になった
- 「\_\_\_\_\_」は誰が担う？  
→家庭外の専門機関  
ex)学校教育、塾、習い事
- その他  
→生命・財産等の「\_\_\_\_\_」：  
司法・行政制度、保険制度  
「\_\_\_\_\_」：病院などの医療機関  
「\_\_\_\_\_」：社会福祉施設  
「\_\_\_\_\_」：保育所やベビーシッター  
など、大部分もしくは一部依存されている状況



# 家族機能が縮小したことにより 家族の役割は減少したのか？

- 学校教育の補習、塾や習い事に通う支援  
→ 家族が担う
- 高齢者の介護  
→ 主婦が重い負担を抱えていることも多い
- 子どもの養育  
→ 核家族の専業主婦に育児不安感が高い  
→ 夫婦共働き家庭の育児負担  
→ ひとり親家庭の生活問題

家族機能の縮小 = 家族機能遂行の負担が軽くなる  
わけではない



# 家庭を取り巻く地域社会の変化

- 近代化以前の地域社会の特徴

大きい子どもたちは小さい子の面倒をみる、小さい子どもたちはより小さい子の面倒をみるのがあたりまえ

地域共同体が「いわゆる一つの大家族」

生まれた時から「だれそれさんの子ども」として

地域の一員に認められていた

子育ても、親（特に母親）が一人で抱え込む

性質のものではなかった

「昔は自由に道路で遊ばせたし、空き地、袋小路があり、子どもは群れをなして遊んでいました。買物、お祝いごと、不幸なことがあった時は、近所の人にしばらく預かってもらうこともできました」新澤誠治(1995)『私の園は子育て支援センター』小学館

近代化以前は、

3つの間（遊び仲間・遊び時間・遊び空間）が保証されていた

親にとって気軽な育児サポートネットワークが身近に存在していた



- 近代化以降（～1980年代後半）の地域社会の特徴  
第2次、第3次産業の発展により、人々はより有利な職を  
求めて都会へ出ていくという現象が生じた  
都市に新しい人々が流入し、新しい地域ができた



核家族が主流のお互いに見知らぬもの  
同士が隣り合わせになる地域

子育ての輪に仲間入りするにも、親の社交能力が試される

ただ、子どもも多く、年間180～200万人の子どもが生まれて  
おり、1970年以降には第二次ベビーブームもあったため、

子どもの多さも一つの要因となり、

都市のニュータウンにもコミュニティは

比較的容易につくられた



- 近代化以降（1980年代後半～）の地域社会の特徴  
少子化が社会問題化

子育てを助け合う近隣との関係づくりはより困難なものとなった  
「公園デビュー」が表すように、公園で子どもを遊ばせることも  
たやすいことではなくなり  
人間関係に気を遣わなければならない状況も生まれてきた

少子化の進行とともに、  
近所の公園には子どもがいない



自分の子どもを同年齢の子どもと遊ばせるために  
車で何分もかけて移動しなければならないこともある





# 家族支援の構造

## 家族支援のターゲット

- 子どもの育ちへの支援
  - 基本的視点である「\_\_\_\_\_」の成長・発達の支援
  - 家庭支援の活動を直接子どもに向けて行うもの
    - 保育所・幼稚園の日常的活動
    - 地域子育て支援活動での子どもに向かいあう活動

保育所・幼稚園での活動を単なる保育・教育活動に  
終わらせず家庭支援を意識した保育活動にするには？

- 子どもがそれまで歩んできた道筋
  - 24時間の生活全体
- } 視野に入れた「\_\_\_\_\_」

地域活動の場合

- 保護者自身、子育てサークル・子育て支援サークル、  
他機関などに対する「\_\_\_\_\_」・「\_\_\_\_\_」  
な立場も考慮



- 親（保護者）の育ちへの支援  
「\_\_\_\_\_」になるための支援  
一人の社会人としての「\_\_\_\_\_」の支援  
→ 就労等による保育を必要とする状態への支援  
一時保育  
育児リフレッシュ などをとおして

心身ともに保護者の生活を豊かにするサービス  
経験を共有しあう仲間づくりが求められる



- 親子関係への支援

親子の信頼及び愛着関係の基礎形成が不安定



保護者としての成熟度が低下

「親になりきれていない親」がより多く出現  
虐待などの例外と考えられていた状況が

一般の保護者にも発生うる状況

多くの保護者は最初から保護者として十分に  
機能しているわけではなく、

「子どもに育てられる」という部分もある

親子関係とは、

「\_\_\_\_\_」（育てあう・育ち合う）関係

保育者は、

親子の関係を「\_\_\_\_\_」という視点が必要となる



- 育む環境の育成

子ども・保護者・親子関係の育ちが存在する  
地域社会である「\_\_\_\_\_」の育成

円滑な親子関係を営むためには・・・

→ 家庭の経済基盤

住宅状況

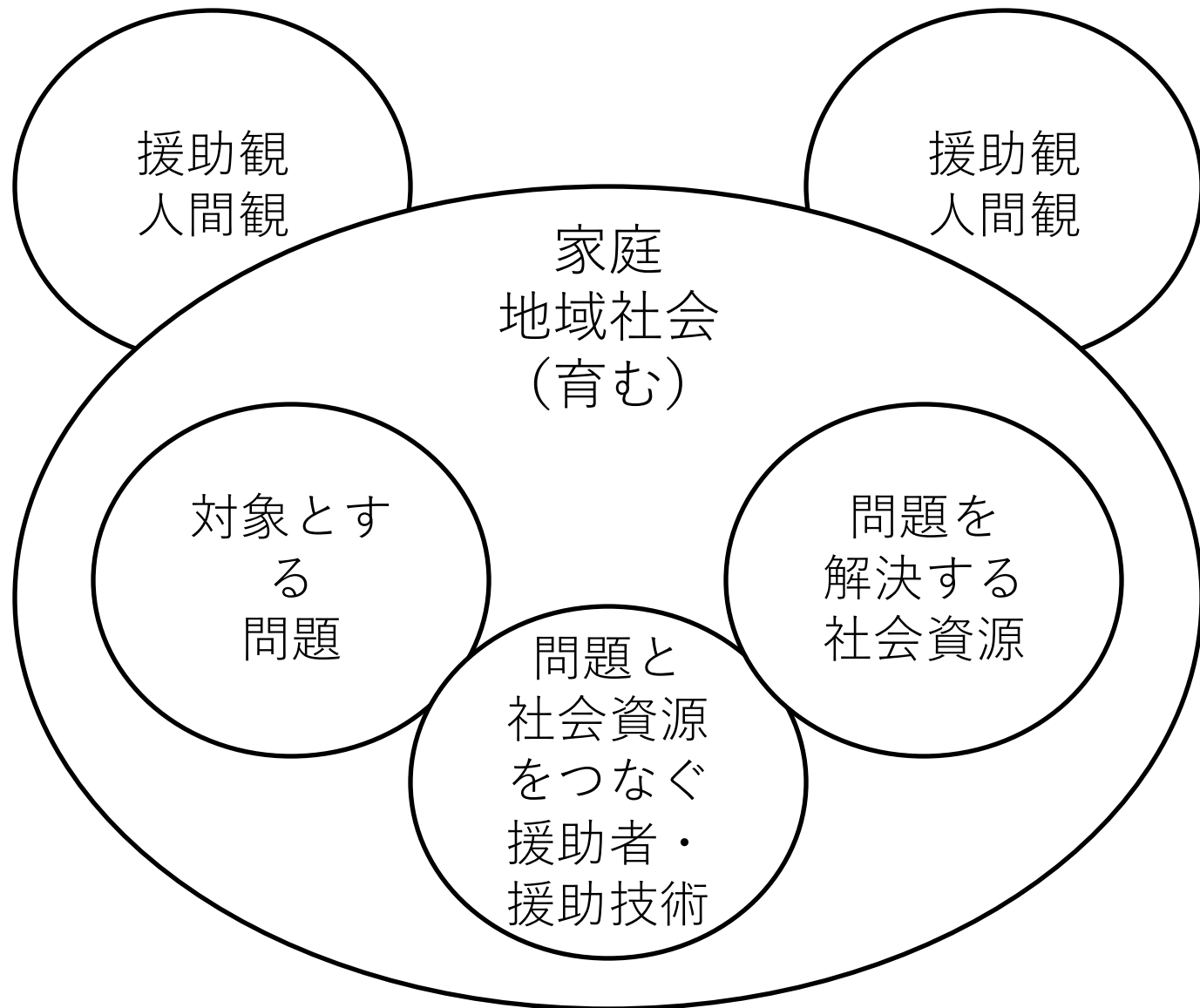
地域の一員として認められ、孤立していない  
など家族が「\_\_\_\_\_」が必要

社会資源の調整

他機関・サービスの紹介必要な要素となる



# 家庭支援の全体像



# 家族支援の構造

## 家庭支援の目標

- ① 保護者の仲間づくり、社会資源づくり  
親子が限られた人間関係の中で向かいあうことにより、閉塞的になりやすい環境を緩和し、子育ての仲間を発見し、社会資源とつながる契機をつくる
- ② 保護者が一人の人間として生きていく支援  
保護者にとって子育ては重要なものだが、そのために、一人の人間としての成長が阻害されることには問題がある。社会の変化が激しいなかで、子育てが終わってからの自己実現ではなく、子育てと並行する自己実現が必要
- ③ 親子関係の支援  
子育て経験の不足のなかで、子どもへの関わりがうまくできない保護者が増えている。子ども自身も少子化のなかで、集団の相互作用を経験する機会が減ってきている。子育て支援では、親子がともに生きていく経験を提供する必要がある







# 子どもにとって家庭とは？

子どもは、「\_\_\_\_\_」ことによって  
人との関係をつくる能力を発達させる

親が愛情一杯に子どもに接すると・・・  
健やかに「\_\_\_\_\_」を形成し、  
社会にも「\_\_\_\_\_」ようになる

親自身が不安だったり、イライラしていると・・・  
いつも「\_\_\_\_\_」していたり、  
自分に「\_\_\_\_\_」が持てず、  
社会に「\_\_\_\_\_」子どもになりやすい